

---

# 梅雨の日に、君とここで。

小鳥遊 恭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

梅雨の日に、君とここで。

### 【Nコード】

N0013U

### 【作者名】

小鳥遊 恭

### 【あらすじ】

高校二年生のある梅雨の日。放課後、図書室の日本文学の棚前に呼び出された僕は、名前も知らない女の子から告白された。

## （前書き）

Twitterでお世話になっております「そうじ たかひろ」さん主催の企画「しずくとつむぐ」に参加させていただきました。正直企画参加とか初めてで震えながら書いています。企画概要『高校二年生のある梅雨の日。放課後、図書室の日本文学の棚前に呼び出された僕は、名前も知らない女の子から告白された』という設定の元書きました。

私含め、二十名参加しています。URLはこちら <http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/46398/blogkey/194314/>

『多分六月九日、晴れてると思います。来なかったらストーカーしてやる。図書室、日本文学棚前二テ待ッ

二〇一一年 五月九日 怪盗二ホンブンガク』

思い切り梅雨のじっとりした日だった。灰色の空が自分を主張している。

「おー、いるじゃん」

声をかけられて、僕の周りの風景が急激にハッキリしてきた。意識は睡魔のせいで途切れていたようだ。

話しかけたのは誰かと思い後ろを振り返ると、そこにはひとりの女生徒が立っていた。部活帰りなのか、そのジャージは雨に濡れている。

「手紙の人ですか？」

ずいぶん長い間にいたような気がする。僕は読んでいた新聞から目をそらした。新聞には交通事故に巻き込まれて亡くなった人の記事が片隅に載っている。女生徒は濡れたジャージをどうするでもなく、そのまま立っている。肩くらいまでの艶やかな、少し茶色がかった髪だった。背はそんなに高くない。勝ち気そうな三角形に吊り上がった瞳が、僕をとらえる。

「秋穂<sup>あきほ</sup>。桜坂秋穂<sup>さくらざかあきほ</sup>があたしの名前。春なんだか秋なんだかわからないでしょ。実は間取って夏生まれ。キミは？」

「と、登田<sup>とじた</sup>……」

「ウン、知ってる」

ダメだ、完全に相手のペースに巻き込まれている。

「あの」

なんの用なんですか、と言おうとすると、桜坂さんは僕の隣に腰掛けた。図書委員の人が怪訝そうに僕たちの方を眺めているのがわ

かつて、僕は恥ずかしくなった。

「あたしずっと前から登田のこと好きなの。あたしと一？に死んでくれる？」

なにを言っているのか意味がわからない。雨がひたすら窓を打ち付ける音。じわつとした緊張の汗が背中を流れる。それだけで構成された空間で、脳内で右から左へ言葉がすり抜けて入った。

「し、死のうかって、どういう」

「えー？ あ、もっと分かりやすく言おう。あたしのこと、殺してよ」

からつとした表情で彼女は笑う。そんな簡単になにを言ってるんだ？

僕が呆気にとられて見ていると、桜坂さんは僕の手を引こうとしてその手がすり抜けた。

人間を相手にしているなら有り得ないことだ。触れられないわけがない。僕はその手をどうしたらいいかわからないまま、下へと降ろす。

僕がいま話しているこの人は？

「さ、くらざか、さん」

桜坂さんは下をうつむいた。その身体は確かに僕には見えているのに、触ることができない人間がいるとか、それはもう、生きて…

…？

「……残念」

やれやれといったふうに肩をすくませる、桜坂さん。

「やっぱり本当だったんだね」

悲しそうに桜坂さんは微笑んで、僕に背を向けて図書室から出て行く。このままだと、二度と話せない人になるんじゃないか。僕も後を追う。僕はいま、有り得ない人と話をしているんだ。

「桜坂さんっ！」

廊下に、僕の声が響いた。桜坂さんは濡れたジャージを引きずったまま、こつちを振り向く。髪からポタポタと雫が落ちて、廊下を

濡らしていた。彼女は間違いなく死んでいるんだ。ちょうど一ヶ月前からそんなものが見え出した。図書室で、ずっとそれらを見ていた。

「気付かなくて、ごめん。でもあの、僕」

振り向いた彼女の悲しそうな笑顔と、そして細かく振り続ける雨の音、微かに響く吹奏楽部の音が、僕を得体の知れない現実に残めている。

「桜坂さん、貴方に」

「あ、おーい、桜坂っ」

感謝の気持ちを口に出そうとすると、後ろから僕の傍を女子生徒が通りすぎていった。同じく雨に濡れたまま、彼女の元へ走っていく。

「どしたの、ひとりで」

グラリ、と視界が揺れたような気がする。確かに僕は存在感がないけど、気付かれないくらいいの、存在感、か？ しかも彼女が会話しているということは、なんというか。

「あー、やっぱり濡れるよねー。こんなときにあのせんせー、意味わかんねっつの」

タオルを渡された桜坂さんは、僕を気にすることもなく話を進める。

僕など見えていないかのように。

「そろそろ桜坂も帰ったほうがいいよー、風邪引いたら大変だし」

「そうだねー、あたし明日朝から体育だしなあ。さんきゅー」

やだなあ、と呟きながら、桜坂さんは女性を見送る。そして彼女の静かな視線が、雨の音と共に僕をつかんだ。

「あ、なんだ。そういうことか」

不思議と冷静だった。窓越しに見えるはずの僕の姿はなく、そして僕に影もなかった。桜坂さんはそんな僕に、決定的な一言をくれた。

「一ヶ月前から図書室にいるんだよ、キミ。朝から、放課後まで。」

多分、夜も、ね」

言われなければ気付かなかったということは、典型的な死んでいくことに気付かなかったユーレイ、ってやつか。頭をかこうとして、その手すら自分をすり抜けていく虚無感を僕は味わった。死んで一ヶ月。自分の葬式は金がかかったんだろうか。親に申し訳ないことをした。

「なんだか、なあ」

そういえば確かに、というレベルだった。授業に行った覚えもなければ、家に帰った覚えもない。どうしたって今ここで僕が生きていることを証明する手段はなかった。

「だからあたし連れてってよ。なんてゆーか、道連れみたいな？　そういう方法、できるんでしょ？　あたし幽霊になっても尽くすよ。一途だから」

生憎ながら、そんな方法わからなかった。自分が死んでることにすら気付かないで図書室にこもってたって、なんていうか……ドジだなあ。

僕は廊下にしゃがむ。もしかしたら浮いてるのかもしれない。思考はクリアだけど感覚がもう曖昧で、聴覚、視覚だけが僕に残されている感覚だった。薄暗い電気の付かない廊下。遠くで雷の音が小さく響く。

「……桜坂さんがもし死んだって、僕を見られるかどうか、わからないでしょ」

嘘だけど、本当だ。僕から他の人は見られるけど、相手からどうなのかはわからない。

そして今、僕が気になるのはただ一点だ。

なんで僕、ここにいるんだろう？

「それもそっか」

笑いながら彼女は言った。

「僕、頭割れたりしてない？　血は？　腕はちゃんとある？」

「キミが死にそんな顔してたのはいつものことだし、それ以外は特

になんとも。それより告白の返事ちょうだい」

ああ、そうか。頭の中にゆらゆらとゆらめく、手紙の文字。それが僕の未練だとしたら、そりゃ確かに図書室でばーっとしてるだろう。彼女は遠い目をして窓の外を見つめた。桜坂さんには、雨の匂いはきつとわかるのだろう。

「僕にもよくわからないけど、とりあえず僕は死んでるらしい。気持ちはずごくありがたいけど、生きてる人と付き合ったほうがいい。誰も得しないよ、これ」

しとしと。無言。しとしと。無言。無言が幾重にも重なっていく。沈黙で廊下が覆われていった。

「言おうと思ったのにキミがすっぱかして帰って、勝手に事故にあって死んじゃったんでしょーが」

申し訳ない、と片手を上げて謝った。生前の僕はなんということをしでかした。

雨の音に紛れてひとつ、嗚咽が聞こえてくる。だけど話しかける前に桜坂さんは、くるりと僕に背中を向けてしまった。止める手立ては、僕にはない。

「すみません、生前の僕が。なんていうか、本当に嬉しいです。嬉しいけど、僕の時間はもう止まってるから、今もしどうこうなっても貴方を幸せにはできません。それはなんというか、死んじやってごめんなさい」

生きていることに執着もなければ死んでいることに執着もない幽霊。もしかしたら一番厄介かもしれない。これはエッセイとして売り出すべきだ、と考えて、僕は自分が死んだことを思い出す。

「勝手に振りやがって……！」

振り返って僕の間を見た桜坂さんの瞳は涙で真っ赤になっていた。彼女の右腕が上がる。条件反射で目を閉じるが、僕のちょうど心臓があつた部分にふと温度が宿った。目を開けると、桜坂さんの腕が僕の身体を貫通している。僕の身体は半透明。そうして僕は段々と、死を自覚した。



「桜坂さん、僕が生まれ変わったらよろしくお願いします。最短で桜坂さんが三十四歳になったら会えるから」

「そんなに待ってられるかあああつ！　っていうか、あたしのことは好きなのかよおおおつ！」

左ストリートをかわす必要もなく、僕はそのまま彼女の温度を感じながら、廊下に響く桜坂さんの声を聴き続けていた。耳と、目と、そして微かな温度だけで彼女に触れていることを自覚する。打撃は少々、多かった気もするけど。

彼女の疑問に答えるにはあまりに僕は存在が薄っぺらくなっていて、とてもじゃないけど言えない。不確定要素ばかりだ。生き返る保証もなければ、生まれ変わる保証だってない。つつーか身体もうないだろ。

「幽霊に八つ当たりしたのなんて、初めて」

鼻をすすって桜坂さんは笑った。僕も死んだというのに八つ当たりされたのは初めてだった。

「おい、桜坂っ。部活終わりだってっ、帰るよーっ」

「わかったー！」

彼女は僕に背を向けて、走り去っていく。途中一度だけ振り返って僕の方を見たけど、すぐに部活仲間らしき人に呼ばれて焦ったように駆けていった。彼女の姿は廊下の曲がり角に消えていく。

最初で最期の告白だった。

このびしょ濡れの廊下は誰が掃除するんだろうと思いつながら、僕は目を閉じて雨の音だけに身を任せた。心は至って平穏だ。特に怒りとか恨みとか、ない。

少しずつ微かに、僕の耳から雨の音が消え去っていった。了

## （後書き）

作者より。作者より……。

なんといいますが、このサイト自体使うのが初めてでしてうるたえております。ROM専で使ってたのですが、まさか私のこれが、初投稿になるとは……！

色々書きたいこととかまだあったのですが、既に千文字オーバーしておりますので書きませんです。

読んでくださった方が、少しでも静かな気持ちになってくだされば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0013u/>

---

梅雨の日に、君とここで。

2011年6月11日18時25分発行